

# マルケサスの異人たち

## —ポリネシア島嶼世界における近代の幕開け—

牧野元紀

はじめに

マルケサス諸島（英名 Marquesas Islands / 仏名 *iles Marquises*）は南太平洋に位置するフランス領ポリネシアの島々である。フランス領ポリネシアの中心地であるタヒチ島からは北東に約1,500kmの距離にあり、日本（成田）からは空路直行便のあるタヒチ島（パペーテ Papeete）での乗り換えを含めて17時間前後かかる。約1,050km<sup>2</sup>にわたる広大な海域のなかに大小12の島々が散らばる。そのなかで比較的面積の大きいヒヴァオア Hiva Oa 島とヌクヒヴァ Nuku Hiva 島の二島が中心となり、ときに歴史の表舞台に顔を出した。現在も両島の空港からはパペーテとの間に毎日1～2便が往来し、片道で3時間ほどかかる。

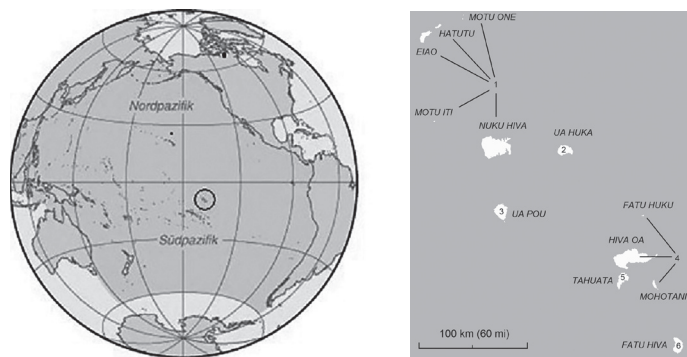


図1 マルケサス諸島の地図および行政区分（Wikimedia Commons より一部改変）

2017年時点での全島の居住人口は9,346人である<sup>1</sup>。主要産業はコブラ<sup>2</sup>やバニラの生産と観光業である。南極から流れてくる寒流の影響を受けるためサンゴ礁は育たず、切り立った山肌が直接海に落ちるような荒々

1 Institut de la statistique de la Polynésie française（仏領ポリネシア統計局）より以下 URL。http://www.ispf.pf/bases/Recensements/2017/Donnees\_detaillees.aspx

2 ココヤシの果実の胚乳を乾燥したもの。油分を60～70%含み、食用油・石鹸・蠟燭などに用いる。コブラ油のしぼりかすは有機肥料や家畜飼料ともなる。

しい景観が広がる。ボラボラ島に代表されるタヒチ周辺の穏やかなビーチリゾートのイメージとはほど遠い。島内は舗装道路がまれであり、主な移動手段は四輪駆動車である。2012年に著者が訪ねたヒヴァオア島でもジャングルの泥道を進むといたるところで野生化した馬・山羊・豚・鶏などに出くわし、野趣あふれる秘境探検の気分を満喫することができた。

かようにマルケサス諸島は我々現代人の今日的視点からみるとまさに絶海の孤島群である。日本ではおろか、この島々を領有する他ならぬフランスにおいても本国の人々の意識には上ることがほとんどないであろう。多くのフランス人にとって太平洋にある自国領土といえば、やはりタヒチであり、ヌーヴェルカレドニー Nouvelle-Calédonie（ニューカレドニア）である。しかし、本国からは容易にアクセスのできない、この僻地・辺境としてのイメージこそがポール・ゴーギャン Paul Gauguin（1848～1903）やジャック・ブレル Jacques Brel（1929～1978）といった芸術家たちを惹きつけてやまぬ大なる魅力であり続けてきたこともまた確かである。

では、歴史的観点に照らしてマルケサス諸島をみた場合、これほどまでに外界から隔離されてきたのかといえば、答えは否である。結論から先に述べてしまえば、マルケサス諸島の孤絶化と周縁化は西洋諸国、とりわけフランスとの関係が強まることによって生じた近現代史上の事象なのである。このことを本小論では文献史学・考古学・人類学の各分野における先行研究の成果に依拠しつつ明示したい。



図2 ゴーギャンの墓

ヒヴァオア島の中心アトゥオナ Atuona の町を見下ろす丘の上にある。

## 1. マルケサス諸島の近代

非西洋世界を対象とする歴史研究において時代区分を検討する際、一般には工業化の進んだ西洋諸国家との接触を「近代」の起点とするのが通例である。近代への突入には軍事的緊張を伴うことが多く、典型的事例としては中国におけるアヘン戦争がそれにあたる。日本における幕末の黒船来航もこれにあてはまろう。

マルケサス諸島における近代の始まりをいつに置くか。著者が想定するのは18世紀後半から19世紀初頭にかけての時期である。記録が残る範囲でマルケサス諸島に西洋人が足を踏み入れたのは1595年のことである。伝説の黄金郷を求めてソロモン諸島を目指したスペインの探検家メンダーニャ Mendaña (1542～1595) の一行が島々を偶然に「発見」し、この航海を支援していたペルー副王のカニエーテ侯爵 Marqués de Cañete の妻 (侯爵夫人) にちなんで命名したのがマルケサス諸島である。果物や水を運んでくれた島民たちに対して、メンダーニャ一行は粗暴で残忍な態度で応じた。わずか2週間余りの滞在中に約200人の島民が殺害されたという<sup>3</sup>。しかし、当時はスペインの国力が衰退し始める時期とも重なり、アジアと新大陸との間で物資を運搬したガレオン船のルートからも大きくそれていたため、マルケサスの名は以後およそ200年もの間ほとんど史料に出てこない。

マルケサス諸島が再び歴史の表舞台に登場するのは1791年、アメリカの毛皮貿易商・航海家のイングラハム Joseph Ingraham (1762～1800) による「発見」である。イングラハムは当時の海図に載っていなかったマルケサス諸島をワシントン諸島と新たに命名した後、ハワイ諸島へと北航した。また、アメリカとの関係でいえば、その後の1813年、同国海軍のポーター David Porter 提督 (1780～1843) が自国捕鯨船の保護と敵対国イギリスの捕鯨船の鎮撫とを目的として太平洋上での軍事活動を展開するなかでヌクヒヴァ島に碇泊した。彼は当時の大統領であったマディソン James Madison (1751～1836) を顕彰すべく島々をマディソン諸島と名づけて合衆国への併合を試みたが、本国議会の批准を得られなかった。

著者はイングラハムによる「発見」とポーター提督による合衆国への

---

3 増田義郎「ヨーロッパ人の太平洋探検」山本真鳥編『オセアニア史』山川出版社、2000年、56頁。

併合の試みがなされるまでのこの約 20 年間をマルケサス諸島における近代の幕開けとみなす。それは欧米の捕鯨船あるいは商船が続々とこの島々に到来し、ときに人や物を置いて去っていく時期でもあった。ロシア初の世界周航を達成したクルーゼンシュテルンの一行がヌクヒヴァ島に立ち寄ったのもそのような折である。彼ら異人たちの邂逅は偶然でもあり必然でもあった。

## 2. クルーゼンシュテルン一行の来島

イヴァン・クルーゼンシュテルン Иван Крузенштерн (1770 ~ 1846) はエストニア出身のドイツ系ロシア海軍軍人である。20 代の頃はイギリス海軍で腕を磨いた国際肌の人物でロマノフ王朝皇帝アレクサンドル 1 世 (在位 1801 ~ 1825) からの信任も厚かった。1803 年、皇帝と露米会社支配人のニコライ・レザノフ Николай Резанов (1764 ~ 1807) の支援を得て、二隻 (ナジェージダ Надежда 号、ネヴァ Невя 号) からなる艦隊を組織し、旗艦であるナジェージダ号の艦長として帝都サンクトペテルブルク郊外のクロンシュタット港を後にした。この航海の主目的は中国そして日本との交易関係の樹立であり、露米会社の進出先としての北米カリフォルニアの調査にあった。

一行はバルト海を抜けて新大陸へ向けて大西洋を横断し、ブラジルに寄港してから南米大陸最南端のホーン岬を回って、南太平洋へ出た。薪水や食糧の調達地として彼らが立ち寄ったのがマルケサス諸島である。その後は北太平洋に帆先を向けて赤道を越え、ハワイ諸島からカムチャツカ半島を経由し、1804 年秋に日本の長崎に到着した。長崎では幕府との間で半年に及ぶ交渉がなされたが、国交樹立には至らなかった。

その後、クルーゼンシュテルンは喜望峰を回って 1806 年夏にクロンシュタットに帰還した。彼が帰国後に著した航海記が『アレクサンドル 1 世陛下の命令下、1803 年、1804 年、1805 年、1806 年にナジェージダとネヴァにより行った世界周航の記録 *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserliche Majestät Alexanders des Ersten auf den Schiffen Nadeschda und Newa*』である。

クルーゼンシュテルンの一行には彼の同僚である海軍軍人のほか、艦隊全体を統率する遣日使節の代表であるレザノフ、そして数多くの学者が乗り込んでいた。そのなかでドイツ出身の博物学者ゲオルク・ハインリッヒ・フォン・ラングスドルフ Georg Heinrich von Langsdorff (1774 ~ 1852)

は『1803年から1807年の世界旅行について *Voyages and travels in various parts of the world during the years 1803-1807*』という優れた航海記録を残した。

クルーゼンシュテルンとラングスドルフの航海記には艦隊が立ち寄った各地で見聞した（当時のヨーロッパ人には）もの珍しい現地住民の社会風俗、動物や植物、地理等の情報が豊富に載る。マルケサス諸島についてもいくつもの興味深い記述を確認できるが、実際のところそのほとんどは島民に混じって暮らしていた2人のヨーロッパ人（後述）から得られた情報に拠っている<sup>4</sup>。

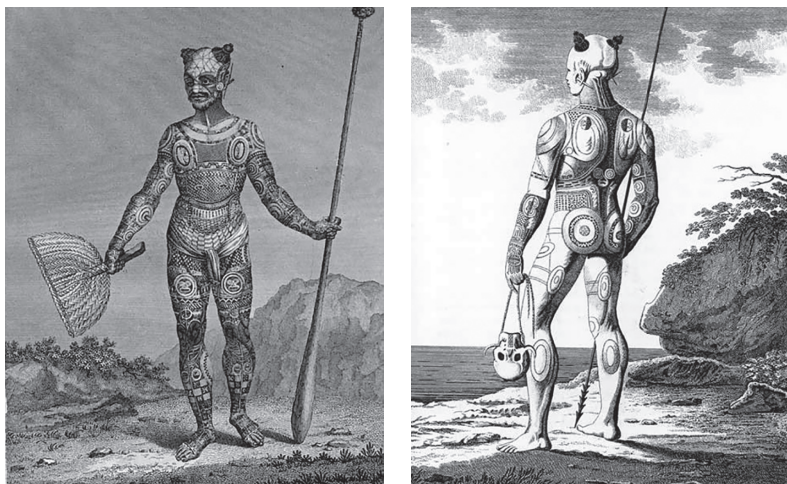


図3 ヌクヒヴァ島の男性

頭頂部から足先まで細かな幾何学模様に入れ墨が施されている  
（ラングスドルフ『1803年から1807年の世界旅行について』所収の挿絵より 東洋文庫蔵）

### 3. 日本人漂流民

クルーゼンシュテルンの率いるナジェージダ号には仙台藩石巻出身の日本人漂流民5人も乗船していた。元々彼らは石巻から江戸へと米を運ぶ若宮丸の乗組員であった。1793年12月に強風と荒波をうけて船が難破し、半年に及ぶ漂流の後に船上で生き残った16人がアリュेशन列島に漂着した。1795年に先住民やロシア人の助けを得て、オホーツ

4 1920年に民族学調査を行ったW.C. ハンディによると、クルーゼンシュテルンとラングスドルフによる記録は多くの点で明らかに間違っており誇張であるとされる（高山純『南太平洋の民族誌—江戸時代日本漂流民のみた世界』p.10）。

ク、そしてヤクーツクを経て、東シベリアの中心都市であるイルクーツクへとたどり着いた。

1803年にレザノフによる日本への使節派遣が決まると、13人がサンクトペテルブルクに向かった。そのうち宗教や健康等の理由でロシア残留を希望した者を除いた4人（津太夫、儀兵衛、太十郎、左平）と、通訳としての役割を期待された1人（善六）の計5人がナジェージダ号に乗り込んだ。彼らはロシア側から日本側への善意友好の証として送還されることになったが、対日交渉の材料とも目されていた。

1804年秋、レザノフは長崎で津太夫ら4人を引き渡し、幕府との通商の可能性を探ったが、さきに述べたように半年も待たされた挙句に追い返される形となってしまった。その報復として1806年と1807年にはレザノフの部下のフヴォストフが蝦夷地を襲撃する事件が起こり（文化露寇）、幕府側に北方防衛の重要性を認識させることになったのは知られるところである。



図4 マルケサス島民の男女  
〔環海異聞〕所収の挿絵 東洋文庫蔵

前掲の図3と同様に男性は全身に入れ墨を施すのに対して、女性はほとんどしていない。手足の爪が極端に長く描かれるのは島民の異様をことさらに誇張した偏見であろうか。

ともあれ、無事に帰国した4人は江戸で仙台藩抱えの蘭学者である大槻玄沢(1757～1827)と弟子の志村弘強(1767～1843)によって事細かな尋問を受けた。その集大成が『環海異聞』である。思いがけずに世界一周をすることになった彼らが漂泊の途上で出会った人物や珍しい事物、風俗などが彩色の鮮やかな挿絵入りで紹介される。ロシアだけでなく、帰路のマルケサス、ハワイについても細かな記載がみられるが、大槻らが持ち合わせていた情報との照合がなされた成果である。本書は単なる漂流記に留まらず、近世末の日本の知識層の対外認識の深度を測るうえで大変貴重な史料である。

#### 4. イギリス人ロバーツとフランス人カプリ

クルーゼンシュテルン一行がマルケサス諸島に立ち寄ったのは1804年5月7日から18日までの12日間である<sup>5</sup>。ナジェージダ号が投錨したのはヒヴァオア島のタイオハエ Taiohae 湾である。ここで彼らは思いがけない出会いをすることとなる。大型船の来航を知った現地居住のヨーロッパ人が相次いで訪問してきたのである。クルーゼンシュテルンの航海記には以下のような記載がある。

(1804年5月7日)11時、我々は西方からナジェージダ号に漕ぎ寄せて来る小舟をみとめた。そこには8人の島民の漕ぎ手が乗っていた。小舟に掲げられた白い旗が私達の注意をひいた。この欧州の平和のしるしは、私たちに、小舟に欧州人がいることを思わせた。予想は的中した。小舟には、はじめ私達が島民であると思いこんだイギリス人がひとり乗っていた。というのは、彼の衣服は、現地の風習にしたがって、一枚の腰布だけだったからである。彼は私達に、2人のアメリカ人からもらった証明書を見せた。そこには、アメリカ人たちがこの島に滞在した時に彼が薪水の世話をしたこと、彼の行動が良かったことが書かれてあった。彼は私達にも援助を申し出た。私は喜んでこの申し出を受け入れた。というのは、このような良い通訳がいれば、あまり知られていないこの島々の風俗習慣について、正確で詳しい情報を得ることができるからである。

(中略)このイギリス人が言うには、もとイギリス商船の船員で

---

5 ラングスドルフは10日間としている(高山前掲書p.21)。

あったが、船内での不和のためにこの島に残され、既に7年住んでいる。ここで彼は酋長の親族の女性と結婚し、島民の尊敬を集めている。したがって、私たちが援助することは難しいことではなかった。それからまた、自分の自由意志でこの島に残ってすでに数年間住んでいるフランス人の男に気をつけるよう忠告した。彼は、このフランス人が悪い奴で、不倶戴天の敵であると言った<sup>6</sup>。

マルケサスに既に7年も住んでおり、現地人の女性を娶り、島民の尊敬も集めていたというこの元商船員のイギリス人とはエドワード・ロバーツ Edward Robarts (1770 頃～ 1832 頃) である。2 人のアメリカ人からもらった証明書 (信任状) はクルーゼンシュテルンらに安心を与えたことだろう。ロバーツは晩年マルケサスを離れてインドのカルカッタで余生をおくった。そこで自らの生涯をふりかえった自叙伝を書き残している<sup>7</sup>。1804年のクルーゼンシュテルン一行との出会いに関しては以下の証言を確認できる。

艦上の人たちで、私を原住民と思わぬ者は誰一人とていなかった。艦長と士官達が私を見つめていた。私の耳にはフランス語、オランダ語、ロシア語、ドイツ語、スウェーデン語など様々な声音がいっぱい飛び込んできた。私は彼らをどうさせたらよいのか、喋ることができなかった。(中略) 私は国旗を掲げてくれるよう手真似した。すると、彼らは私の予想に反してロシア国旗を掲げたのである。そこで私は、怪しげなロシア語で彼らに話しかけた。皆が私を見つめた。フランス人の一紳士が、君はフランス語を話せるかね、と尋ねてきた。はい、少しばかりと私がフランス語で答える。すると今度は艦長がロシア語で、いったい君は何国人なのか、と問いかけてきた。イギリス人ですよ、と私。艦長はかなり立派な英語を喋った<sup>8</sup>。

クルーゼンシュテルンは先述したようにイギリス海軍で長期の修練を

---

6 加藤久祚『初めて世界一周した日本人』 pp.120-121.

7 Edward Robarts, *The Marquesan Journal of Edward Robarts 1797-1824*, Edited by Greg Denning, Australian National University Press, 1974.

8 石川栄吉『日本人のオセアニア発見』 p.68.



積んだ経験があり、英語は堪能であった。イギリス人であるロバーツとイギリス通であったクルーゼンシュテルンとは馬が合ったのかもしれない。クルーゼンシュテルンの航海記においてマルケサスに関する情報のほとんどはこのロバーツの証言に基づくものである。

これに対して、ロバーツが“不倶戴天の敵”としたフランス人の“悪い奴”についても言及しておきたい。その名はジョゼフ・カブリ Joseph Kabris (1780～1822) である。港町ポルドーの出身でやはり船員として若い頃にマルケサスに流れ着き、ヌクヒヴァには1798年から暮らしていた。ロバーツ以上に「現地化」していたとみられ、クルーゼンシュテルン一行との会話においても母国語のフランス語をかなり忘れていたとされる。ナジェージダ号がヌクヒヴァから離れる前に別れの挨拶に来たのだが、悪天候に見舞われてしまい船から降りて島へ戻る機会を逸してしまった。結果、彼は一行とともにヨーロッパへ帰還する羽目となった。

1817年にフランスに帰国してからは生計を立てるために「ヌクヒヴァ王」の衣装でマルケサス語を喋り、全身の入れ墨を見せ、自らの一生を語る見世物を上演した。妻子のいるマルケサスへの帰還を希望していたが、42歳で病没したという<sup>9</sup>。以下に1817年7月29日付の新聞記事がある<sup>10</sup>。帰国して間もなくの様子が伝わる。

ロシア軍艦によってフランスに戻ってきたカブリという男はマルケサス諸島の一つであるヌクヒヴァに何年もの間滞在したが、このたび王に謁見することとなった。王はこの男を快く迎えたが、全身が入れ墨で覆われていたことから、興味津々でこの特異な外見を凝視し、彼に特別に褒美を与えることを命じた (1)

(1) 入れ墨は非常に優美で規則的であり、アラベスク模様のようにであった。ギリシア風のようにでもある。この施術は針と薬液を用い、表皮と内皮の間に消えない痕を残す方法である。

ここで言及される「王」とはルイ18世 (在位1814～1824) のことである。やはり頭から足先までに及ぶ全身の入れ墨が目を引きいたようであ

---

9 その一生は最近にわかに注目を集めている。以下の伝記がフランスで最近刊行され、2020年のフェミナ賞の榮譽に輝いたことが大きい。Christophe Granger, *Joseph Kabris. Ou les possibilités d'une vie 1780-1822*, Anamosa, 2020, Paris.

10 *Gazette de Lausanne*, 29 juillet 1817

る。この謁見によりカブリは300フランの褒美を下賜された。

ヒヴァオア滞在中とカムチャツカまでの航行中、カブリから得られたマルケサスに関する種々の情報はラングスドルフが記録に留めた。ドイツ人の博物学者ラングスドルフはフランス語にも堪能であり、カブリの半生は博物学的研究対象として大いに興味を惹かれたものと思われる。



図5 ジョゼフ・カブリの肖像画

(左はラングスドルフ『1803年から1807年の世界旅行について』所収挿絵・東洋文庫蔵  
右は没後の1824年頃に刷られたという版画・ケブランリー美術館蔵)

『環海異聞』にもロバーツとカブリに関して若干の言及がみられる(以下、原文の崩し字を翻刻)。

一日彼国の舟にて兩人本船へ漕き付し者あり。これ罵人とは異なり、尤兩人共に裸体にて面と股へはかり入墨し、頭は皿髪にて唐人の如くまだ布の如き物を犢鼻褌にしたり。此兩人本船のカペタンエ書付を以申けるは、我々壺人はアンゲリ国、壺人はハランソースケ国の者なり。拾余年已前此罵へ漂着し、帰るへき便もなく月日を送りし内、罵主の女壻となり、今はここに永住する事なれりと也。此二人の者オロシア辞も通する趣、こなたにも両国の言葉文字も弁へ居る事なれば、互に容子分りたり<sup>11</sup>。

11 『環海異聞』巻13。杉本つとむ他『環海異聞 本文と研究』pp.358-359。

この『環海異聞』の報告するところでは、「兩人」（アンゲリ国人＝イギリス人、ハランソースケ国人＝フランス人）が一緒にやって来たと言われているが、これは事実と反するようである。実際のところはイギリス人のロバーツが最初にやって来て、それからしばらく間をおいてフランス人のカブリがやって来たことは前掲のクルーゼンシュテルンとラングスドルフの航海記さらに、ロバーツの自伝から明らかである<sup>12</sup>。

社会人類学者・オセアニア民族学者の石川栄吉（1925～2005）が既に指摘しているように、ロバーツとカブリはいわゆる「ビーチコウマー」と呼ばれる人々のはしりであった<sup>13</sup>。18世紀の後半から19世紀前半にかけて、太平洋の島嶼では捕鯨・アザラシ猟・白檀・ナマコ交易が盛んとなり、欧米船の水夫達が現地に滞留するようになった。彼らは漂流、脱走はたまた置き去り、あるいは自らの主体的意思によって島に留まったのである。現地では島民の生活慣習に従う一方、島に立ち寄る欧米船の水先案内や薪水補給、貿易の仲介、通訳などを務めた。歴史的にみると大なり小なり文化のブローカー的役割を担ったという<sup>14</sup>。

ハワイ諸島の統一を成し遂げたカメハメハ Kamehameha 大王（1758頃～1819）の側近として政治的・軍事的支援を行ったイギリス人のジョン・ヤング John Young（1742～1835）もまたそうしたビーチコウマーの一人である。主体的・意図的であったにせよ、あるいは意図せず結果的であったにせよ、彼らがポリネシアの近代化に果たした役割は大きかった。

なかでも、マルケサスは本稿で取りあげたクルーゼンシュテルン一行の事例からわかるように、大西洋を越えて南米廻りで太平洋に入ってくる欧米船の最初の寄港地となる可能性が高かったため、ビーチコウマー（異人）を通じた近代化の波もポリネシアの中では比較的早い時期に受け始めることとなった。

## 5. マルケサス諸島の前近代

ビーチコウマーに象徴される「異人」たちの相次ぐ到来がマルケサス諸島に近代の幕開けを告げた。しかし、振り返ってみるに、これは果たして近代に限った事象なのであるか。西洋人の来島に限ってみれば確

12 石川栄吉『日本人のオセアニア発見』p.66.

13 石川前掲書、p.72.

14 石川栄吉「ポリネシアのビーチコウマー」（『国立民族学博物館調査報告』59, pp.50-67, 2006年）

かにその通りである。しかし、考古学的見地に立つと、マルケサスの島々には古来いろいろな人々が流れ着き、さらに各地へと拡散した形跡がみられる。島内の最古の文化層からは土器が発掘されており、マルケサスの人々が先史時代の東ポリネシアでは土器を唯一使用する比較的高度な文明を有していたことはつとに知られている<sup>15</sup>。

太平洋島嶼世界における考古学の泰斗として国際的に著名な篠遠喜彦(1924～2017)の調査によると、マルケサス諸島に最初の人々が移住してきたのが紀元300年頃である。西方約3,500kmのサモア諸島からやって来たと推測される。その後、紀元700～1000年頃にかけて北方のハワイ、東方のイースター島、西方のニュージーランドへと大型のアウトリガーカヌーや双胴船を用いてポリネシアン集団移住は次第に進んだ。マルケサス諸島はこの三つの島々を頂点とする広大なポリネシアトライアングルの真中に位置しており、ポリネシア文化の揺籃の地であった。

文字記録のない先史時代を含めて通史的にみると、マルケサスは外の世界とは決して隔絶などしておらず、むしろ人と物とが東西南北を盛んに行き交った海の十字路の一大中心であった。それは欧米人が南米経由で押し寄せてくる近代の幕開けまで間断的に続いたと考えられる。

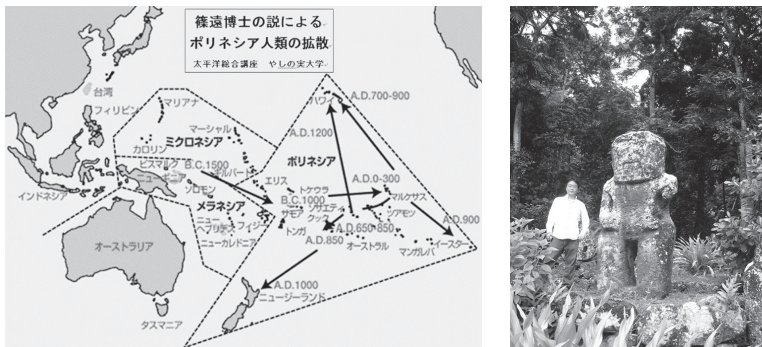


図6 ポリネシアトライアングル(左)<sup>16</sup>。モアイのルーツともいわれるヒヴァオア島に残る大型の神像ティキ(右)。著者の背丈(171cm)よりはるかに大きい。

15 高山前掲書、pp.17-18.  
 16 自由学園 学園長ブログ 第40回「太平洋考古学の第一人者、篠遠喜彦先生逝く」  
<https://www.jiyu.ac.jp/blog/ga/64842>

## 6. 近代化の影響

しかしながら、近代化する欧米人との接触は他の太平洋の島々と同様に、マルケサス諸島においても極端な人口減少をもたらした。クルーゼンシュテルンらが来島した18世紀末頃、マルケサス全島において島民は5万人から10万人はいたと推定されているが<sup>17</sup>、1853年に11,900人、1883年には5,576人と減り続け、1931年にはなんと2,283人にまで減少した<sup>18</sup>。19世紀をとおして西洋人の持ち込んだ武器やアルコール、そして何よりも結核・麻疹・性病などの感染症が人口激減の大きな原因であった。島嶼の先住民はもともと生態環境に順応し、その人口も自然調整がなされてきた。しかし、異人たちの増加をうけて感染症に免疫を持たない彼らは次々と命を落としていった。

近代におけるマルケサス諸島の衰退はヨーロッパ勢力の拡大と表裏一体であり、時間軸においてほぼ歩みを一にしている。1791年、タヒチ島北東部の首長であったポマレ Pōmare 1世（在位1791～1803）はイギリス海軍バウンティ Bounty 号の反乱参加者などヨーロッパ人との接触を通じて武器弾薬の入手にいち早く成功し、タヒチ全島の武力統一を成し遂げた。続くポマレ2世（在位1803～1821）がロンドン伝道協会 London Missionary Society の宣教師との交流を通じてキリスト教へ改宗したことで、タヒチ島とその周辺のソシエテ諸島の王権統一とキリスト教化は同時進行した。

しかし、ポマレ4世（在位1827～1877）治下でイギリスとフランスが互いを後ろ盾とするプロテスタントとカトリックの宗派对立に巻き込まれることとなる。1842年から1848年にいたるフランスによる軍事介入に対して、イギリスが消極的態度を取った結果、タヒチはフランスの保護国となった。その後、1880年にフランスに完全併合され、ポマレ王朝はついに滅亡した。

同時代の世界の海運史上における大変動がその背景にある。1869年にスエズ運河が開通し、1880年にはパナマ運河の建設が始まったのである（1914年開通）。タヒチ島は太平洋におけるフランスの重要な物流

---

17 クルーゼンシュテルン来島時のヌクヒヴァ島の人口はロバーツの情報によると18,000人、クルーゼンシュテルン自身は12,000人ぐらいであると見積もっている（高山前掲書、p.41）。

18 その後、フランス植民地期には微増し始め、1956年には4,165人となり、2017年には9,346人となっている。前掲フランス領ポリネシア統計局 Institut de la statistique de la Polynésie française の web 公開データおよび“A propos des résultats statistiques du Recensement de 1962 en Polynésie Française” *Journal de la Société des océanistes*, 1968 等に依拠。

拠点となる可能性を秘めていた。なかでも、主要港のパペーテはフランス本国とフランス領ポリネシア植民地とをつなぐ政治経済の中心都市として周辺の島々からヒトとモノとを次々と吸い寄せた。フランス領ポリネシアにおけるタヒチ島への中央集権の動きは1949年に「海外領土 Territoire d'outre-mer」に昇格し自治権が拡大されるまで加速し、その傾向は「海外準県 Collectivités d'outre-mer」となった2004年以降も今日まで緩やかに続いている。

さらにポリネシア全体を俯瞰するならば、アメリカ合衆国による太平洋制海権の獲得とその戦略拠点となったハワイ諸島の20世紀半ば以降にみられる地位向上は（1959年に州昇格）、ハワイこそがポリネシアの代表的象徴であるとの認識を世界中に広げた。他方、フランス領ポリネシアのポリネシア文化圏における相対的地位の低下は顕著である。このような流れにおいて本来はポリネシアの一大中心であったマルケサスの周縁化と僻地化は時を追うごとに進行した。

### むすびにかえて

マルケサス諸島は今日のフランス領ポリネシアのなかで主島のタヒチ島から遠く隔たる島々であり、足を延ばす観光客もそう多くはない。しかし、実際に訪れてみると今もなお独特の歴史と豊かな文化を肌身で感じられる地域である。この島々がタヒチ島（パペーテ）ほどの都市化あるいは俗化を免れているのは、著者のような外部の観察者からすると幸いであり、多少の不便さもまた心地よい。

しかし、マルケサスに対して外の人間が抱くこうした最果ての地のイメージは近代以降に形成されたものである。先史以来ここはポリネシアの海上交通の要であった。無数の「異人」たちが到来し、異文化が出会い混じり合う舞台となった。近代に入ってフランス本国の植民地政策がタヒチ島へ集中するまでは辺境どころかポリネシア文化の原郷として確たる地位を占めていたのである。

マルケサス諸島に近代の幕開けを告げたのは18世紀末から19世紀初めにかけて欧米から到来したピーチコウマーやキリスト教の宣教師に代表される新たな「異人」たちである。先住民のたどったその後の苦難の道のりを考えると、彼らによる半ば強制的な「近代化」は決して手離しで歓迎される事象ではない。しかし、刻々と変容する現地社会の有様を自伝や書簡報告のかたちで克明に伝えたのもまた彼らである。そこには

職業や国籍、人種や民族、宗教の別から生じる抜きがたい当時の様々な偏見が含まれており、その扱いには当然ながら細心の注意が必要である。

こうした前提に立って新たな史料の発掘と綿密な分析を行い、先行研究が用いた航海記等の既存史料を再検討すること、さらに日本や他のアジア諸国における漂流記とを突き合わせることで、ポリネシア・太平洋島嶼の近代史研究は今後なお新たな展開が期待される分野である。本小稿では先達の研究成果に拠りつつ近代前夜のマルケサス諸島の事例を実験的に取り上げてみた。読者諸賢のご叱正を乞いたい。

## 参考文献

### 【史料】

- 大槻玄沢『環海異聞』 文化4年（1807年）、（東洋文庫、三-H-cを-1）
- Adam Johann von Krusenstern, *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806, auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander, des Ersten, auf den Schiffen Nadeshda und Newa, unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine*. St. Petersburg, 1810-1812（東洋文庫、貴重書O-1-A-38）
- Georg Heinrich von Langsdorff, *Voyages and travels in various parts of the world, during the years 1803, 1804, 1805, 1806, and 1807*, London, H. Colburn, 1813-14（東洋文庫、貴重書O-1-A-43）
- Edward Robarts, *The Marquesan Journal of Edward Robarts 1797-1824*, Edited by Greg Denig, Australian National University Press, 1974
- “Le Sieur Cabris, ramené en France...”, *Gazette de Lausanne*, 29 juillet 1817

### 【二次資料】

- 石川栄吉『日本人のオセアニア発見』（平凡社、1992）
- 石川栄吉「ポリネシアのビーチコウマー」（『国立民族学博物館調査報告』59, pp.50-67, 2006）
- 加藤久祚『初めて世界一周した日本人』（新潮社、1993）
- 杉本つとむ他『環海異聞 本文と研究』（八坂書房、1986）
- 高山純『南太平洋の民族誌－江戸時代日本漂流民のみた世界』（雄山閣出版、1991）
- 増田義郎「ヨーロッパ人の太平洋探検」山本真鳥編『オセアニア史』（山川出版社、2000）
- Christophe Granger, *Joseph Kabris ou les possibilités d'une vie 1780-1822*, Anamosa, Paris, 2020